

# 唐人「皇甫東朝」の名を記した土器

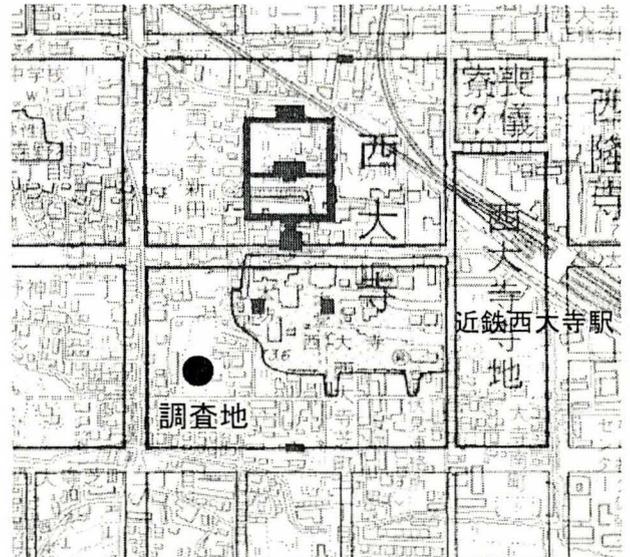
平城京跡（西大寺旧境内）奈良市西大寺新田町

2009年に行った西大寺旧境内の発掘調査によって、その南西部にあたる十一面堂院と西南角院とを区画するとみられる東西溝から、底部外面に大きく縦書きで、左から右へ「皇浦（甫）／東口〔朝カ〕」などと墨書した須恵器の杯が出土しました。天平八年(736)年の遣唐使船の帰国の際、波斯（ペルシャ）人の李密翳らとともに来日した唐人、皇甫東朝を指すものとみられます。

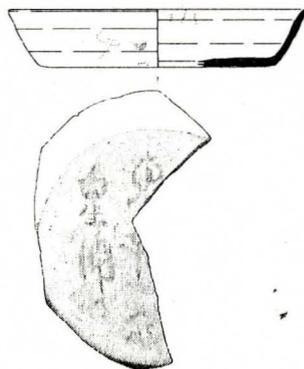
この土器が出土した溝からは神護景雲二年(768)の年号、石上朝臣（石上宅嗣）の名を記した木簡や、イスラム陶器片なども出土しています。

皇甫東朝は天平神護二年（766）に唐楽を奏した功績により、従五位下の位が与えられ、神護景雲元年（767）には雅楽寮員外助、花苑司正の職についていることが『続日本紀』の記事によってわかります。奈良時代の鑑真和上の来日はあまりにも有名ですが、僧侶以外の唐人の来日も奈良時代にはあり、渡唐した我が国の阿倍仲麻呂や藤原清河らが帰国できず唐の朝廷に仕えたのとは対照的に、皇甫東朝は来日し、日本の朝廷に仕えた唐人の一人です。

土器には「所」や「水」といった他の文字もあり、習書として書かれた可能性もありますが、皇甫東朝の日本での活動時期とも合致し、8世紀の日唐間の交流をものがたる上でも貴重な資料です。



発掘調査地点



「皇甫東朝」墨書須恵器杯の実測図（1/4）

口径：15.6 cm 器高：3.1 cm



「皇甫東朝」墨書須恵器杯の写真

(奈良文化財研究所 中村一郎撮影)